

* 3月11日に発生した東日本大震災から数か月が過ぎ、当初の混乱も表面的には大分落ち着きを取り戻している感はありますが、原発の事故などまだ現在進行形で進んでいる問題などがあり、正常化へ向けた課題は山積み状態です。改めてここに、このたびの東日本大震災により被災された地域の皆様、関係の皆様には、心よりお見舞い申し上げ、被災地の一日も早い復興を心より祈念申し上げます次第です。

* 今回の震災に対しては、想定外の出来事を強調する意味でも「1,000年に一度」というフレーズがよく使われています。過去の地震の歴史をひも解きますと、確かにマグニチュード9.0を越す地震は有史以来日本には起こっておらず、一般常識の枠を飛び越えたすさまじいことが起こってしまったということを表示するには都合の良いフレーズかもしれませんが、それを免罪符にするわけにはいかないと思います。なぜ地震や津波の備えが不十分だったか、そもそも地震の予知が無理ではないのか、また、日本のような地震国での原子力発電所の防災の設計指針は適切だったのか、といったいろいろな議論がそれぞれの分野で様々な観点から活発に行われています。詳しいことはここでは余り深入りしませんが、私個人の思いとしては、月並みですが、今回の震災を教訓にして二度と同じような被害が生じないように今後は万全の準備を関係する機関で行うことが最も大事なことだと思います。そのためには十分な検証を行って頂き、有益な情報を学び取っていくことだと思います。電子情報通信学会のような技術者、科学者が集うソサイエティでも会誌記事や研究会活動を通じて専門家の立場から今回の災害を検証し、間接的な形ではありますが、安心・安全な社会の仕組みの充実に貢献していくことが求められます。また、今後の復興の糧になるような新しい科学技術の紹介をどんどん行い、元気な日本の姿を学術面から内外にアピールするのも本会の担うべき一つの仕事だ、と感じています。そのためにも、着実に復興が進んでいるという実感を会員の皆様に感じてもらえるように、社会に活力を与える記事を発信していき、内外に災害に屈しない日本の姿をどんどんアピールしていく使命があると感じています。

* ところで、今回の震災では、TwitterやFaceBookなどのSNSコミュニケーションツールが、情報伝達手段として大いに利用され役立ったと喧伝されています。一昔前までは災害時にはラジオが一番確実な情報収集手段といわれていましたが、今や、携帯ツールが災害時での有用なツールとしての主役の座を奪いつつあるようです。震災直後、どのようにして情報にアクセスしたかの調査でも上位にランクインしています。これらの携帯ツールは情報を収集できるだけでなく、ソーシャルネットワークなどを通じ個人が自由に発信もでき、ユーザ間の情報共有の促進に大きく貢献しています。このように携帯ツールが生活に密接に関係してくるに従い、老若男女の区別なく誰にでも使えるものにしていくことが重要となってきますが、そのための機器の改善もいろいろと行われているのが実際の製品を見ると分かります。例えば、文字の大きさや画面の見やすさ、操作の容易性などで格段の進歩が見られ、誰にでも簡単に使えるような工夫が近頃の携帯ツールには多く見られます。デザインも無骨なものからよりスタイリッシュなものへ変貌を重ねています。そして、SNSコミュニケーションツールとの親和性が高く、今回の震災でより一層注目が高まり、平常時には考え付かなかった使い方もされて、緊急時に有用な情報機器としての認知が進みました。その反面、間違った情報による風評被害の広がりが問題にもなっています。ネット社会がどんどん進み、今までとは違った情報流通の功罪が生じています。東日本大震災とそれに連なる原発被害の問題は、災害国日本における新しい情報アクセスのあり方をいろいろと考えさせてくれます。これらの分野は本会が専門とするところであり、今後いろいろな形で取り上げ、議論すべきところが多くある、と感じています。そして、実りある議論の土壌を作るためにも、まずはそれらの最先端技術を余すことなく紹介していくことが、最初の試みであると考えます。

* 大きな災害の後はどうしても沈みがちになります。実際、節電の影響か、街も暗くなかなか元気を出しにくい雰囲気があります。そのような状況を打ち破るためにも、とにかくにも日本の底力を本会の得意とする分野でどんどんと発信していくことが重要である、と考える次第です。

(編集特別幹事 苗村昌秀)